

帰依三宝

仏教徒の大切なよりどころ

安富 信哉

■ 仏教徒の出発は帰依三宝から	1
■ 何を尊いこととして生きていくのか	4
■ 法名の意味	10
■ 帰敬式の歴史	17
■ 門徒であるという名告り	23
■ ほとけさまの子という関係	29
■ 葬儀でおかみそりをするということ	40
■ 無縁社会の中で縁に気づいていく	47
■ 浄土へ入る門	52
■ あとがき	56

■ 仏教徒の出発は帰依三宝から

帰敬式ききょうしきを受式する、そのことで最も心に留めておきたいのが帰依三きえさん宝ぼうということ。帰依三宝は、仏法僧ぶつぽうそうに帰依すること、仏教徒における出発点、基本です。仏さまの教えをよりどころとして生きるものになる、それが帰依三宝の始まりです。仏教というと、アメリカなどでは、「瞑想めいそうする」(メディテーション)宗教だというふうに思われる方が多いのですが、実は、伝統仏教ではどのような宗派でも帰依三宝が基本なのです。

ところで、今から百年以上前、シカゴで万国宗教会議という会議もたれました。そこにはキリスト教徒をはじめ、ユダヤ教徒、イスラム教徒、仏教徒が集いました。日本からも仏教各宗派の僧侶、神道の神職の

方々がはるばる海を越えて出席しました。一八九三年のことです。清沢満之先生（一八六三年—一九〇三年）の『宗教哲学骸骨』が初めて世界に紹介された会議でもありました。当時アメリカはキリスト教の国として、キリスト教以外は認めないというような風潮が非常に強かったのです。そういう時代に初めてシカゴ万国宗教学会議というのが開催された。釈宗演師（一八六〇年—一九一九年 臨済宗の僧）など、有名な人が参加しました。今日言われている宗教の多元主義は、それはある意味でこの時から始まったと言えるでしょう。キリスト教、ギリシャ正教、イスラム教、ユダヤ教、仏教、その信徒たちが一堂に会したわけです。それからちやうど百年が経った一九九三年に、再び万国宗教学会議がシカゴで開かれました。その時に私もそこに出席する機会に恵まれました。

その会議にはキリスト教など諸宗教の人々が大勢来ていらっしやいました。仏教からは、チベットからダライ・ラマ師、ベトナムからティクナツト・ハン師という有名な僧侶らが記念講演に来ていました。もちろん日本からもいろいろな人が一般出席者として参加したわけです。

その会議のある部会でこういう議論がありました。「仏教と言っても、大乘仏教だいじょうもあれば、テーラヴァード（上座部）仏教など、いろいろあります。では仏教に共通するのは何でしょうか」というのです。「当然それは瞑想だろう」という声が上がりました。ところが私たち真宗の教えを聞く者は瞑想の行をしません。だから「仏教に共通するのは瞑想だ」と言われると、私たちの立場がないのです。

その時に私は仏教徒で全部共通するのは何かと考えました。そしてそ

れはやはり帰依三宝だと思つたのです。帰依仏・帰依法・帰依僧の信仰ですね。「Buddham saraṇam gacchāmi (ぶつだん・さらなん・がっちゃーみ)」に始まる偈文がありますね。いわゆる「三帰依文」です。これはインドのパーリ語です。この偈文は日本にも伝えられていますね(『真宗大谷派勤行集』にも収載)。三帰依は万国共通です。お釈迦さまが生まれた遠いインドから、この日本、さらには欧米まで共通している偈文が三帰依文です。仏教徒であるということの第一の証。私は、それは帰依三宝になると思います。

■何を尊いこととして生きていくのか

この帰依三宝は、仏教の各宗派によって受けとめ方が違うと思います。

仏教で一体三宝、あるいは別体三宝と申します。その正確な意味は、仏教学者にお尋ねいただきたいのですが、私は、三宝一体の立場と三宝別体の立場から、帰依三宝のおこころをいただいております。端的に言えば、浄土真宗においては、三宝一体の立場からは、「帰命尽十方無碍光如来」、すなわち南無阿弥陀仏におさまります。が、三宝別体の立場からは、南無阿弥陀仏の法を説かれた覚者(お釈迦さまや諸仏)、南無阿弥陀仏という言葉にまでなった法、そして南無阿弥陀仏の法によって結ばれた僧伽(あつまり)、これらに帰依することだと思ひます。帰敬すると言つてもいいのです。

真宗には戒律はありませんが、元来仏教は三帰戒と言つて、帰依三宝が戒律の出発でもあるわけです。親鸞聖人も、『教行信証』の化身土巻

を見ますと、やはり三宝に帰依せよという教誡を示しておられるのですね。

『般舟三昧經』に言わく、優婆夷、この三昧を聞きて学ばんと欲わば、乃至 自ら仏に帰命し、法に帰命し、比丘僧に帰命せよ。余道に事うることを得ざれ、天を拜することを得ざれ、鬼神を祠ることを得ざれ、吉良日を視ることを得ざれ、と。

〔真宗聖典〕三六八頁

真宗においても、やはりこの三帰戒は基本なんです。また、親鸞聖人の最も尊敬された日本の仏教者で、師の法然上人に先だつて聖徳太子がおられます。聖人が和讃で「和国の教主」と仰がれた方です。その聖徳太子は「十七条の憲法」の中で、

篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり。すなわち四生の終わり
の帰、万の国の極めの宗なり。何の世、何の人か、この法を貴び
ずあらん。

〔真宗聖典〕九六三頁

という言葉を残しています。帰依の語は、帰敬とも表されます。和讃にも「一切道俗帰敬しき」（曇鸞讃）、「承久の太上法皇は 本師源空を帰敬しき」（源空讃）と、「帰敬」という言葉が出てきます。帰依僧の精神を「帰敬」の語で大切にされたのです。

真宗の宗風は在家仏教です。親鸞聖人は、その範を聖徳太子の信仰生活に求められました。在家仏教の場合、帰敬式というものの持つ意味は非常に大きいと思うのです。僧侶については僧になる得度式がある